

# 特別支援学校（知的障害）小・中学部教員の専門性に関する 保護者と教員の意識の差に関する調査研究

久保恭子\* ・ 坂本 裕\*\*

要旨 特別支援学校（知的障害）小・中学部教員の専門性，ならびに，家庭と学校の連携方法に対する意識の差を明らかにすることを目的として，特別支援学校（知的障害）小・中学部教員 285 名と保護者 304 名に小・中学部教員専門性評価尺度と連携方法に関わる質問紙調査が実施された。その結果，教員は保護者以上にきめ細やかな保護者との連携や，子どもの自立的な生活につながる教育実践，保護者との親交的関わりをその専門性と意識していることが指摘された。一方，家庭と学校の連携方法には，保護者は“個別懇談”“学級通信”等を，教員は“学級懇談”“電話連絡”を有効としており，その相違が指摘された。

キーワード：特別支援学校（知的障害），小・中学部教員，保護者，連携，意識

## 問題と目的

障害者権利条約批准を目指し，2011年8月に改正された障害者基本法には，障害者の教育に関わる人材の確保及び資質の向上が条文として新設された。このことから，これまで以上に特別支援学校教員の専門性の向上のための検討が不可欠となっている

こうした状況を踏まえ，特別支援学校（知的障害）小・中学部教員を対象とした調査が行われ，特別支援学校（知的障害）小・中学部保護者が求める専門性として，第1因子【確かな専門性に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携】，第2因子【わが子の自立的な生活につながる教育実践】，第3因子【保護者への家庭生活に関する情報提供】，第4因子【保護者との親交的関わりへの期待】の4因子から構成されていることを明らかにされている<sup>4)</sup>。

そこで本報においては，前述した特別支援学校（知的障害）小・中学部保護者が求める特別支援学校（知的障害）小・中学部教員の専門性の因子構造を用いて，特別支援学校（知的障害）小・中学部教員専門性，ならびに，家庭と学校の連携方

法に対する保護者と教員の意識の差を検討する。

## II 方法

### 1 課題

課題Ⅰ：特別支援学校（知的障害）小・中学部教員専門性に対する保護者と教員の意識の差を明らかにする。

課題Ⅱ：家庭と学校の連携方法の重要度に対する保護者と教員の意識の差を明らかにする。

### 2 対象

特別支援学校小・中学部在籍児保護者 304 名。  
特別支援学校小・中学部教員 285 名。

### 3 期間

2016年12月16日～2017年1月16日。

### 4 手続き

X県内特別支援学校（知的障害）6校の小・中学部保護者 586 名，小・中学部教員 374 名を対象として，質問紙を学校長に依頼し，留置法にて実施した。調査対象者には，調査の趣旨，調査参加は個別の自由意志に基づくものであること，回答内容は統計的に処理され個人が特定されないこと，加えて教員には保護者の回答と比較することなどを文書で示し，同意を得た者のみが調査に参加した。学校ごとに取りまとめた後，回収を行った。その結果，小・中学部保護者 354 名，小・中学部教員 325 名の回答が得

\* 岐阜県立恵那特別支援学校

\*\* 岐阜大学大学院教育学研究科

られた。そのうち、保護者分は不備のあるもの(50名)を除き、304名分を分析対象とした。教員分は回答に不備があるもの(40名)を除いた285名分を分析対象とした。なお、保護者の回答の一部は前報4)にて報告した。

5 項目・回答方法

1) 特別支援学校(知的障害)小・中学部教員専門性評価尺度

特別支援学校(知的障害)小・中学部教員に保護者が求める専門性に関する43項目を設定した<sup>4)</sup>。

回答は“1あまり必要でない”“2少し必要である”“3わりに必要である”“4とても必要である”の4件法で行うようにした。

2) 教員と保護者による連携方法の重視度評価  
“連絡帳”“個別懇談”“学級懇談”“電話連絡”“家庭訪問”“学級通信”“授業参観・保護者の授業参加”“送迎時のやりとり”の8項目について、“1あまり重要でない”“2少し重要である”“3わりに重要である”“4 とても重要である”の4件法で回答を求めた。

6 分析方法

1) 課題 I

特別支援学校(知的障害)小・中学部の保護者が特別支援学校教員に求める専門性の因子4)について、各因子の保護者の合計得点と教員の合計得点についてMann-WhitneyのU検定を行う。

2) 課題 II

特別支援学校(知的障害)小・中学部の保護者が特別支援学校教員に求める専門性の因子4)の各因子の保護者の合計得点、教員の合計得点を被説明変数とし、保護者と教師の連携方法の保護者、教員そ

れぞれの重視度評価を説明変数とするカテゴリカル回帰分析を行う。

なお、分析についてはSPSS Ver. 25.0を用いた。

III 結果

1 課題 I

Mann-WhitneyのU検定の結果をTable1に示した。第1因子【確かな教育観に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携】、第2因子【わが子の自立的な生活につながる教育実践】、第4因子【保護者との親交的関わりへの期待】に1%水準で有意な差があり、教員の得点が上位であった。

2 課題 II

1) 第1因子【確かな教育観に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携】

(1) 保護者

カテゴリカル回帰分析の結果をTable2に示した。ANOVAの結果は有意であり、R<sup>2</sup>は.534であったが有効な分析と判断した1)2)。1%水準で“連絡帳”“個別懇談”“学級通信”“送迎時のやりとり”“授業参観”が、5%水準で“家庭訪問”が有意に関与していた。

(2) 教員

カテゴリカル回帰分析の結果をTable2に示した。ANOVAの結果は有意であり、R<sup>2</sup>は.354であったが有効な分析と判断した。1%水準で“学級懇談”“電話連絡”“授業参観”が有意に関与していた。

Table1. 保護者が特別支援学校教師に求める力量と教員の意識の相異

	順位の平均		統計検定量U
	保護者	教員	
第1因子	256.75	335.80	54,948.500 *
第2因子	272.52	318.98	50,153.000 *
第3因子	288.74	301.68	45,223.000
第4因子	231.57	362.66	62,602.000 *

\* P<.01

Table2. 第1因子と連携方法の関係性について

要因	保護者		教員	
	F値	有意確率	F値	有意確率
連絡帳	11.001	.000	.110	.740
個別懇談	21.199	.000	1.428	.233
学級懇談	1.123	.327	7.189	.000
電話連絡	2.180	.115	11.698	.000
家庭訪問	4.451	.036	.811	.369
学級通信	11.984	.000	.823	.440
授業参観	7.513	.007	5.787	.001
送迎時	14.316	.000	3.449	.064

R<sup>2</sup>=.534 ANOVA<sub>p</sub>=.000 R<sup>2</sup>=.354 ANOVA<sub>p</sub>=.000

2) 第2因子【わが子の自立的な生活につながる教育実践】

(1) 保護者

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 3 に示した。ANOVA の結果は有意であり、 $R^2$  は.352 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“授業参観”“学級通信”，5%水準で“個別面談”“連絡帳”が有意に関与していた。

(2) 教員

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 3 に示した。ANOVA の結果は有意であり、 $R^2$  は.163 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“電話連絡”，5%水準で“学級懇談”“連絡帳”が有意

に関与していた。

3) 第3因子【保護者への家庭生活に関する情報提供】

(1) 保護者

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 4 に示した。ANOVA の結果は有意であり、 $R^2$  は.286 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“学級懇談”が有意に関与していた。

(2) 教員

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 4 に示した。ANOVA の結果は有意であり、 $R^2$  は.222 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“学級懇談”“電話連絡”が有意に関与していた。

Table3. 第2因子と連携方法の関係性について

要因	保護者		教員	
	F 値	有意確率	F 値	有意確率
連絡帳	3.766	.024	4.477	<b>.035</b>
個別懇談	5.220	<b>.023</b>	.116	.734
学級懇談	.225	.798	4.360	<b>.014</b>
電話連絡	.063	.939	5.135	<b>.002</b>
家庭訪問	1.323	.268	.279	.757
学級通信	5.046	<b>.007</b>	.462	.630
授業参観	9.146	<b>.003</b>	2.502	<b>.060</b>
送迎時	1.254	.287	.280	.756

$R^2 = .352$  ANOVA  $p = .000$        $R^2 = .163$  ANOVA  $p = .000$

Table4. 第3因子と連携方法の関係性について

要因	保護者		教員	
	F 値	有意確率	F 値	有意確率
連絡帳	2.143	.119	.268	.268
個別懇談	1.294	.272	1.149	.285
学級懇談	11.342	<b>.000</b>	20.006	<b>.000</b>
電話連絡	.335	.563	4.646	<b>.003</b>
家庭訪問	.602	.439	.099	.906
学級通信	3.210	.074	.190	.827
授業参観	.732	.571	1.058	.305
送迎時	.777	.379	0.897	.345

$R^2 = .286$  ANOVA  $p = .000$        $R^2 = .222$  ANOVA  $p = .000$

Table5. 第4因子と連携方法の関係性について

要因	保護者		教員	
	F 値	有意確率	F 値	有意確率
連絡帳	4.458	<b>.012</b>	2.831	.094
個別懇談	1.347	.247	.483	.488
学級懇談	9.816	<b>.000</b>	4.384	<b>.005</b>
電話連絡	3.422	<b>.034</b>	6.889	<b>.001</b>
家庭訪問	.771	.381	.370	.544
学級通信	2.913	.056	.873	.419
授業参観	1.314	.270	2.523	.058
送迎時	3.571	<b>.029</b>	4.406	<b>.013</b>

$R^2 = .352$  ANOVA  $p = .000$        $R^2 = .300$  ANOVA  $p = .000$

4) 第4因子【保護者との親交的関わりへの期待】

(1) 保護者

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 5 に示した。ANOVA の結果は有意であり、R<sup>2</sup> は .352 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“学級懇談”，5%水準で“連絡帳”“送迎時のやりとり”“電話連絡”が有意に関与していた。

(2) 教員

カテゴリカル回帰分析の結果を Table 5 に示した。ANOVA の結果は有意であり、R<sup>2</sup> は .300 であったが有効な分析と判断した。1%水準で“電話連絡”“学級懇談”，5%水準で“送迎時のやりとり”が有意に関与していた。

IV 考 察

1 課題 I

特別支援学校（知的障害）小・中学部教員専門性に対する保護者と教員の意識の差として、第1因子【確かな教育観に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携】、第2因子【わが子の自立的な生活につながる教育実践】、第4因子【保護者との親交的関わりへの期待】において教員は保護者以上に特別支援学校（知的障害）小・中学部教員専門性に意識していることが明らかになった。

このことは、教員が保護者との関係構築のために保護者をねぎらう姿勢を大切さにしているとされ

ることと重なる<sup>3)</sup>。そして、特別支援学校の教育実践においては、家庭との連携を密にして教育活動を行うことや生きる力を育む教育実践の積み重ねが根本にある<sup>5)</sup>ことも影響していると考ええる。

2 課題 II

第1因子【確かな教育観に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携】と、第2因子【わが子の自立的な生活につながる教育実践に関する連携方法】において、Table 7 のように、保護者は“個別懇談”“学級通信”等を有効な連携手段として捉えた。その一方で、教員は“学級懇談”“電話連絡”を有効な連携手段として捉えており、その捉え方に明らかな相違があることが明らかになった。特別支援学校教員は担当する幼児児童生徒の実態や保護者の思いを長期的・総合的に捉えることができているであろうかとの不安感が強い<sup>8)</sup>。加えて、特別支援学校教員にとって良好な関係である保護者の思いを捉えきれているかという不安感はストレスナーとなっている<sup>9)</sup>。また、特別支援学校小学部教員は保護者との有効な連携において“電話連絡”を主たる手段としている<sup>10)</sup>。このような特別支援学校教員の保護者との関係性における心的構造感を、保護者と個別にて一人の子どもの教育活動についての個別の教育支援計画や個別の指導計画に基づいて話すことになる個別面談<sup>7)</sup>や、保護者に文面にて一定期間の幼児児童生徒の教育活動を伝える学級通信<sup>6)</sup>よりも、集団や非対面の場にて口頭での“学級懇談”“電話連絡”を強く選択している今回

Table6. 各因子と関連の高い連携方法

因 子	保護者	共通	教員
<確かな教育観に裏付けられたきめ細やかな保護者との連携>	連絡帳、個別懇談 学級通信 送迎時のやりとり 家庭訪問	授業参観・参加	学級懇談 電話連絡
<わが子の自立的な生活につながる教育実践>	授業参観・参加 学級通信、個別懇談	連絡帳	電話連絡 学級懇談
<保護者への家庭生活に関する情報提供>		学級懇談	電話連絡
<保護者との親交的関わりへの期待>	連絡帳	学級懇談、電話連絡 送迎時のやりとり	

のような結果に表れたように思われる。

ただし、第4因子【保護者との親交的関わりへの期待】においては保護者も“学級懇談”“電話連絡”を有効な連携手段としていた。このことから情緒的なつながりにおいて“学級懇談”“電話連絡”を活用できる可能性が示唆された。

謝辞

本研究に際し、質問紙調査にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 石村貞夫(2005) : SPSS によるカテゴリカルデータの分析 (第2版) . 東京書籍.
- 2) 石村貞夫・加藤千恵子・石村友二郎(2011) : SPSS による臨床心理・精神医学のための統計処理. 東京書籍.
- 3) 上村恵津子・石隈利紀(2007) : 保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して— 教育心理研究, 55, 560-572.
- 4) 久保恭子・坂本 裕(2019) : 特別支援学校(知的障害)小・中学部教員に保護者が求める専門性に関する検討. 発達障害研究, 41(1), 94-98
- 5) 文部科学省(2018) : 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部)
- 6) 西 正道(2015) : 学級便り. 坂本 裕編著. 新訂 特別支援学級はじめの一步. 明治図書. 53.
- 7) 佐伯英明(2018) : 知的障害特別支援学校実務ガイド. ジアース教育新社.
- 8) 坂本 裕・守屋朋伸・沖中紀男(2013) : 特別支援学校教員の専門性におけるコンセプチュアル・スキルへの関与要因についての探索的研究. 発達障害研究, 35, 161-167.
- 9) 坂本 裕・一門恵子・後藤成美・堀田愛理(2015) : 特別支援学校教員のストレス尺度の作成と妥当性・信頼性の検討. 発達障害支援システム学研究, 14, 45-48.
- 10) 坂本 裕・伊藤彩音・松本和久・久保恭子(2017) : 特別支援学校小学部教員の保護者との連携に関する意識についての調査研究. 生活中心教育研究, 30, 36-45.

